【パネル報告】

映像に見る常民生活の伝統と再生

宮本　瑞夫

1

昨年平成 25（2013）年は、渋沢敬三先生の没後 50 年ということで、記念事業が各所で開催された。

ここに取り上げる「映像」についての報告も、「渋沢敬三記念事業」の一環として、企画・実施された歴博映像祭「映像民俗学の先駆者たち：渋沢敬三と宮本馨太郎」の、私なりの予報的な報告・感想であることを、まずお断りしておきたい。

この企画は、実は、渋沢先生とアチックミューゼアム（以下、アチックと略す）に関係する機関の一つとして、私共の宮本記念財団にも、記念事業への参加のお声掛けを頂いた折、記念事業として、いわゆる「アチックフィルム」（渋沢先生、馨太郎などが撮影したアチック関係フィルム）のデジタル化による保存、公開、活用を提案させて頂いたことに始まっている。

昭和 54（1979）年 3 月、父が亡くなる 1 か月前、NHK（日本放送協会）から、「昭和回顧録　薩南諸島　民俗の旅―昭和 9 年―」（1979 年 4 月 11 日放送）への出演の話があり、この企画に大変深い想いを寄せていた父を知り、父の渋沢先生がお撮りになった映像に対する、並々ならぬ想いを思い出し、しかも、どれも既に 70 年前に撮影された映像であり、このまま放置しておいたら、永久に見る機会を失ってしまうのではないかという危機感から、このような企画の提案をさせて頂き、委員の皆さんに賛成頂き、実現したものであった。

とはいえ、私自身は、映像の専門家ではないので、取り敢えず、父が設立に深く関わった、佐倉の国立歴史民俗博物館の内田順子氏に相談し、長年、渋沢フィルム、宮本フィルム[1]に深い関わりのあるヴィジュアルフォークロアの北村皆雄氏、東京シネマ新社の岡田一男氏、新潟大学の原田健一氏ら、映像の専門家の協力を得て、プロジェクトを立ち上げ、企画の実現に漕ぎ着けた次第である。そういった訳で、ここでは、渋沢敬三先生の民具研究及びその資料に対する姿勢、また映像との関わりなどについて、祖父勢助、父馨太郎との関係を通して述べてみたい。

図 1　アチックミューゼアムのロゴマーク（宮本フィルム「パイワン族の採訪記録」）

2

父宮本馨太郎（明治 44〈1911〉年～昭和 54〈1979〉年）が、渋沢敬三先生（明治 29〈1896〉年～昭和 38〈1963〉年）と初めて、お目にかかったのは、父親の勢助（明治 17 年～昭和 17 年）に従って、アチックの例会に出席したことに始まるという。

馨太郎の回想によれば、勢助と共に奥利根の流れに沿って歩いた、藤原地区や片品川を調査した折の映像を、アチックの例会に持参し、映写した時だったという。それは、丁度、先生が本格的に民具研究

に取り組まれようとしていた昭和4（1929）年5月頃のことだったという[2]。このように、馨太郎にとって、渋沢先生との出会いは、また映像を通しての出会いでもあったといえる。

渋沢先生は、早くから、ご尊父篤二氏（明治5年～昭和7年）の影響もあり、写真（『瞬間の累積』など）・映像などにご造詣が深く、横浜正金銀行ロンドン支店勤務の折（大正11年9月17日～大正14年8月4日）、英国で、16 mmカメラ、シネコダックを購入され、帰国後の大正15（1926）年4月18日～5月2日、台湾（～沖縄）旅行から、記録映画の撮影を開始、以後、民俗採訪記録、家庭映画など多数の映像を残されているという[3]。

一方、馨太郎も中学生時代の昭和初年（1926～1927年）頃から、フランスの、9.5 mm、パテ・ベビィーの撮影機で、映像を残している。初めは、遊びとして、立教大学入学後は、「小型映画研究会」を組織、「学園ニュース」や芸術映画、「うちわの出来るまで」などの民俗映画、民俗採訪記録、また「我が家の記録」といった家庭映画など多数を残している。馨太郎の場合、ただ映画を撮っただけではなく、また数々の映像論を書き残していることにも注意しておきたい。

3

ところで、馨太郎の昭和5（1930）年は、三河の花祭見学で始まっている。馨太郎の手帳によれば、正月2日、午後11時の列車で東京を発ち、3日は、本郷町中在家（なかんぜき）、4日は園村足込の花祭を見学している。一行は、花狂いを自称される渋沢先生のほか、折口信夫、早川孝太郎、今和次郎、祖父勢助ら9名であった[4]。

図2　榊の舞（榊鬼）（宮本フィルム「花祭をたづねて」）

図3　牛の角突き（二頭の牛のアップ）（宮本フィルム「越後竹沢村の牛の角突き」）

この時の足込の花祭を撮影したのが、宮本フィルムの「花祭をたづねて」である。また、この映像は、原田健一氏のご教示によれば、同年2月15日の「第十回民俗学談話会」において、早川氏の解説により、上映されている[5]。そのため、映像の内容も、馨太郎が自由に撮影した作品というよりも、どちらかといえば、渋沢先生のお考えの下に、アチックの仕事の一環として撮影されたものといえるのではなかろうか。それは、花宿の室内の映像も、花祭のクライマックスと考えられる「湯ばやし」の場面も全くなく、翌日の昼間、縁側近くの戸外で、神谷徳一氏による「榊の舞」（「榊鬼」 もっとも重要な鬼の舞）と、祭りの最後に舞われる「しづめ」を再現したものが、映像の中心になっていることからも窺われる。

渋沢フィルムの「花祭（三河北設楽郡にて）」「花祭」※東京三田綱町邸 の2作は、小林光一郎氏の研究によれば、それぞれ相補的な作品であることが明らかにされている[6]が、あるいは、これに加えて、馨太郎の「花祭をたづねて」も、渋沢フィルムとの補完的な作品と考えることも出来るのかもしれない。

というのは、例えば、昭和10（1935）年4月の、渋沢フィルムの「古志郡竹沢村角突」と、宮本フィ

ルムの「越後竹沢村の牛の角突き」の、竹沢村での牛の角突きの映像であるが、宮本記念財団における映像プロジェクトの研究会で、2作品を見比べて見たところ、渋沢先生は、高い所から、全体を俯瞰する位置で、馨太郎は、接近して近写する位置で撮影しており、事前に役割分担が行われていたのではないかという意見で一致したことからも、2作品が、相補的な関係にあることが想像される。

なお余談であるが、宮本フィルムの、角を突き合わせる2頭の牛の顔のアップは、なかなかの迫力であることを申し添えておきたい。

4

渋沢先生は、「アチック根元記（一）」の中で、アチックについて、次のように語っている。

> 何を自分はアチックに見出さんとしつゝあるか。人格的に平等にして而も職業に専攻に性格に相異なつた人々の力が仲良き一群として働く時その總和が數學的以上の價値を示す喜びを皆で共に味ひ度い。ティームワークのハーモニアスデヴエロープメントだ[7]。

大正14（1925）年12月4日のアチック復興第1回例会に於いても、「チームワークとしての玩具研究」が確認されている[8]。

こうしたなかで、昭和9（1934）年5月、実施された薩南十島の調査は、アチックの同人を中心として、ほかに植物学・農学・人類学・宗教学などの当代第一線の教授たちの参加を得て、正に学際的な総合学術調査であり、当時としては、画期的なものであったといえる[9]。なお、この調査の様子は、渋沢フィルム「十嶋鴻爪」に詳しい。特に、調査団を迎える各島々の風景、人々の表情と服装及び「民具二、三」など、島々の民俗、民具へのこだわりは、いかにも渋沢先生の映像らしさを示しているといえる。一方、それに対して、この時に撮られた宮本フィルム「薩南十島」の方は、頭上運搬の映像など、興味深い画面も見られるが、各島断片的で精彩がない。渋沢フィルムに先生自身が、何カットか登場されること、また最初にも述べたように、この映像に対する父の深い想いを考えると、あるいは、渋沢フィルムの撮影のかなりの部分に、父馨太郎が参加していることも考えられるのではなかろうか。

図4　竹島民具二三（渋沢フィルム「十嶋鴻爪」）

（所蔵：神奈川大学日本常民文化研究所）

図5　中馬の服装（渋沢フィルム「昔時の運輸制度　伊那街道の中馬」）

（所蔵：神奈川大学日本常民文化研究所）

というのは、昭和6（1931）年7月、伊那街道を中心に発達した馬による荷物運送の「中馬」制を再現、記録・再生した渋沢フィルム「昔時の運輸制度伊那街道の中馬」の撮影にも、父が参加していることが十分考えられるからである。父は、この調査に参加しながら、自分の映像を全く残していないことからも、恐らく、撮影にかなり深く関わったのではないかと推察される。それはともかく、この「中馬」の映像は、中馬の面影、中馬の用具、着装の様子、また「中馬は行く」の遠景の場面など、よく準備され、往時の「中馬」制の様子が再生・再現され

ており、渋沢フィルムのなかでも、大変質の高い内容の映像となっているといえる。

5

ところで、馨太郎が本格的に民具の調査・研究に従うようになったのは、これより遅れること、昭和10（1935）年の春、大学を卒業して、三田綱町のアチックへ本格的に通うようになってからだという[10]。

実際、馨太郎がアチックの本格的な民俗調査を体験するのは、昭和11（1936）年7月～8月中旬に行われた朝鮮（韓国）・慶尚南道蔚山邑達里（ダルリ）においてであった。この調査は、東京帝国大学医学部学生・崔応錫らによる「社会衛生学的調査」と連動する形で、馨太郎のほか、小川徹、村上清文の2名が民俗班として派遣されたものであった。馨太郎の担当は朝鮮の服飾調査で、疾病、体格の検査を受けた約480名の農民が当日着用していた冠物（かぶりもの）・衣服・履物の種類・材料・色彩・柄（縞柄）及び結髪状態・服飾付属品などを対象とした調査票によるものであった。

この調査に対し、渋沢先生は、「醫者に協力して貰ふことにより、常民の服飾をぬぎ棄てられた形ではなく、身に纏った生きた形で、肌衣までも調査し得ることは僥倖とも云ふべき機会に恵まれた」[11]ものだったと指摘され、馨太郎にエールを送られている。

こうした常民の日常生活のありのままを、出来るだけ資料化しようとするところに、先生の民俗調査及び民俗資料に対する姿勢を伺い知ることが出来ると思う。こうした先生の姿勢は、当然のことながら、また写真や映像といった視聴覚機材の積極的な活用にも繋がったかと思われる。勿論、この調査でも、渋沢先生が、8月中旬以降の「多島海探訪記」を16 mmのシネコダックで、撮影されているのに対して、馨太郎は、8月中旬までの「朝鮮（達里にて）」を、9.5 mmのパテベビーで撮影し、貴重な映像を残している。ここにも、渋沢フィルムと、宮本フィルムの住み分けというか、明確な役割分担が読み取れると思う。

6

渋沢先生の民俗品（後の民具）などモノへのこだわりは、馨太郎の服飾調査への励ましの言葉からも明白であるが、その理由は、

> 自分等が特殊の敬愛と同情とを持つ民俗學に、今迄、生物學的とでも云ひ度い様な、実証的研究法があまり用ひられて居らぬことを、聊か不満に思つて居たので、ミュージアムの本来の性質に鑑み、此のアティックで民俗品を採集することの意義を自ら悟つたのであつた。

と語り、コトバだけではなく、「實物が出て來て初めてその生活の技術なり態様なり、又その奥の思考に氣のつくものは澤山ある。」と指摘されている。

さらに、「今、アティックには民俗品が、大凡、二千点程収蔵されて居る。集めて見てすぐ氣のつくことは、（中略）動植物に於ける如き自然分類は不可能であるが、一種の分類學は成り立つとさへ思はれる。」と言い、「そして之は民俗學の一部門として極めて重要なこゝ思ふ。」[12]と述べられ、先生の後々の民具研究の方向を示されているといえる。

先生のこの論文「アチックの成長」が書かれたのが、昭和8（1933）年9月ということから考えると、日本在来の履物の分類・体系を示した祖父勢助の『民間服飾誌履物篇』に触発されたところが、大いにあったかと思われる[13]。

それは、昭和10（1935）年度に入って行われた、アチック最初の民具の共同研究に、「足半草履」の研究が取り上げられたことからも窺い知ることが出来るかと思う。

また雑誌『民俗学　第5巻第8号』誌上の「學界消息」欄で、アチックの同人村上清文氏が、本書を取り上げ、

> この本の最も大きな仕事は履物の分類にあつたのであらうが、目下資料の分類が緊急の事となつてゐる民俗學にとつて、かうした書物の出たことは誠にうれしいことであるし、又本書は造型物に關するフオークローアの側からの業績としても今和次郎氏の『日本の民家』は別として最初のものであり、整然たるものであり、将来のこの方面に向つて大いに開拓されねばならぬこの學問の基底となるものである[14]。

と述べていることからも、そのことは、窺い知ることが出来ると思う。

7

さて、先にも記したように、アチックにおける最初の民具の共同研究は、昭和10（1935）年度に行われた「足半草履の研究」であったことは、広く知られているところである。

なぜ、足半草履が取り上げられたかというと、短小で、特異な構造の上、既に廃絶したものと思われていたものが、アチックの収蔵資料の中では、意外にも比較研究に耐え得る数の多くのものが収集されていたことによるという[15]。

アチックミューゼアム編『所謂足半（あしなか）に就いて〔豫報〕』[16]の渋沢先生の後記によれば、「本編はアチックミューゼアム同人のチームワークにより成る。故にその責任はアチックそれ自身に在る。」とし、研究に当たってのそれぞれの分担は、

> 足半草履の概念及び摘要＝渋沢先生、標本資料の整理並びに測定、足半の構造、結びの名称＝小川徹、足半の製作及び足半と他の履物＝磯貝勇、足半の文献資料、名称及び史的考察＝宮本馨太郎、足半の用途及び民俗の整理＝高橋文太郎、レントゲン写真＝癌研究会　松尾象一、挿入写真＝木川半之丞

としている。加えて、「尚宮本勢助氏が常に我々のかたわらから凱切な注意と教導を惜まれなかったことは我々の深く感銘して居る所である。」という言葉が添えられている。なお使用された標本資料の総数は、347点で、そのうち、アチックの収蔵品239点、日本青年館郷土資料室収蔵品30点、宮本勢助収蔵品78点であった。

ここで、注目されるのは、草履を、

一　すげ緒草履（普通の草履）
二　芯緒草履（所謂足半に属すべきもの）

と分類し、芯緒草履をさらに、

A　足半草履又は結び草履（狭義の足半）
　　足半（本来の足半）
　　長足半
B　綯込草履又は綯込足半
　　（足半とも呼ばれるも草履の称呼多し）

とに分けていることである。このように鼻緒の構造によって、一つの分類案が示されたことは、民具研究の上で、画期的なことであったといえる[17]。

また絵巻物など、絵画資料の渉猟、足半の構造のレントゲン写真の活用、16 mm 映画による記録撮影など、ヴィジュアル資料の活用も、目を見張るものがあったといえる。

先生は、「跋」の最後に、「尚我々は一つの試みとして同一課題を多数者で手別けをして研究して見度いとの願望を以前から持つて居た故今回は之の方法を用ひて見たのである。全くチームワークとしては我々にとつて最初の試であつた。その有効さを覚ると共に一面資料の整理に記述に配列に幾多の冗長と不備と不均衡とを発見自覚した。」と記している。

これ以後、アチックでは、早川孝太郎らの作成した「蒐集物目安」（昭和 5 年作成）を大幅に改訂した『民具蒐集調査要目』[18] を作成し、また保谷には、これらアチックが蒐集した民具を収蔵する民族学博物館（民族学協会附属民族学博物館）を設立するなど、渋沢敬三先生とアチックの活動は、戦後の文化財保護法や博物館法の施行、また国立民族学博物館、国立歴史民俗博物館の設立に関わるなど、これらの大きな礎となる足跡を残したといえる。

註

1——渋沢フィルム、宮本フィルムの名称は、撮影者に基づいて区分している。収蔵については、神奈川大学日本常民文化研究所と宮本記念財団に分割保管されている。
2——宮本馨太郎『民具入門』慶友社（昭和 44 年 6 月 25 日刊）2 頁
3——川崎賢子・原田健一『岡田桑三　映像の世紀　グラフィズム・プロパガンダ・科学映画』平凡社（2002 年 9 月 4 日刊）22 頁
4——宮本瑞夫「渋沢民族学を実践した父」〈『月刊　みんぱく　第 25 巻第 5 号』〉財団法人千里文化財団（平成 13 年 5 月 5 日刊）1 頁
5——「學界消息」〈『民俗學　第2巻第3号』〉民俗學會（昭和 5 年 3 月 10 日刊）66 頁
6——小林光一郎「二つの『花祭』―アチック一六ミリフィルム『花祭（綱町邸）』と『花祭（三河北設楽郡）』」〈『歴史と民俗　28』〉平凡社（2012 年 2 月 20 日刊）
7——祭魚洞生「アチック根元記（一）」〈『アチックマンスリー　第一号』〉アチックミューゼアム（昭和 10 年 7 月 30 日刊）1 頁
8——祭魚洞生「アチック根元記（三）」〈『アチックマンスリー　第三号』〉アチックミューゼアム（昭和 10 年 9 月 20 日刊）1 頁
9——宮本馨太郎編『図録民具入門事典』柏書房（1991 年 2 月 25 日刊）145 頁
10——（注 1）の前掲書 1 頁
11——渋沢敬三「跋」〈朝鮮農村社会衛生調査会編『朝鮮の農村衛生　慶尚南道蔚山邑達里の社会衛生學的調査』〉岩波書店（昭和 15 年 2 月 5 日刊）285 頁
12——渋沢敬三「アチックの成長」〈『祭魚洞雑録』〉郷土研究社（昭和 8 年 12 月 30 日刊）6 頁～ 7 頁
13——宮本勢助『民間服飾誌履物篇』雄山閣（昭和 8 年 7 月 5 日刊）
14——「學界消息」〈『民俗學　第5巻第8号』〉民俗學會（昭和 8 年 8 月 10 日刊）103 頁～ 104 頁
15——（注 8）の前掲書 145 頁
16——昭和 11 年 5 月 30 日発行　初出は、『民族學研究第一巻第四号　第二巻第一号』
17——宮本瑞夫「民具研究事初めの頃―アチックの高橋文太郎と宮本勢助―」〈『武蔵保谷村だより　8』〉下保谷の自然と文化を記録する会（2013 年 1 月刊）
18——『民具蒐集調査要目』〈アチックミューゼアム　ノート　第七〉アチックミューゼアム（昭和 11 年 6 月 30 日刊）

参考資料

アチックフィルム目録抄（渋沢フィルム・宮本フィルム）

A　渋沢フィルムのみ
「昔時の運輸制度　伊那街道の中馬」（昭和 6 年 9 月　16 分）所蔵：神奈川大学日本常民文化研究所
「多島海探訪記」（昭和 11 年 8 月　26 分）所蔵：神奈川大学日本常民文化研究所

B　渋沢フィルム　宮本フイルム
「花祭（三河北設楽郡にて）」（渋沢　昭和 4～9 年頃　12 分）所蔵：神奈川大学日本常民文化研究所
「花祭」※東京三田綱町邸（渋沢　昭和 5 年 4 月 14 日　18 分）所蔵：神奈川大学日本常民文化研究所

「花祭をたづねて」（宮本　昭和 5 年 1 月　12 分）所蔵：宮本記念財団

「十嶋鴻爪」（渋沢　昭和 9 年 5 月　52 分）所蔵：神奈川大学日本常民文化研究所
「薩南十島」（宮本　昭和 9 年 5 月　14 分）所蔵：宮本記念財団

「古志郡竹沢村角突」（渋沢　昭和 10 年 4 月　12 分）所蔵：神奈川大学日本常民文化研究所
「越後竹沢村の牛の角突き」（宮本　昭和 10 年 4 月　7 分）所蔵：宮本記念財団

「白萩村アワラ田植」（渋沢　昭和 11 年 6 月　8 分　※この作品は「直江津片田家行事・白萩村アワラ田植」というフィルムの後半部分であり、フィルム全体は 13 分です。）所蔵：神奈川大学日本常民文化研究所
「珍しい深田の田植」（宮本　昭和 11 年 6 月　3 分）所蔵：宮本記念財団

C　宮本フィルムのみ
「朝鮮（達里にて）」（昭和 11 年 7 月～ 8 月　14 分）所蔵：宮本記念財団
「台湾高雄州潮州郡下　パイワン族の探訪記録」（昭和 12 年 3 月～ 4 月　47 分）所蔵：神奈川大学日本常民文化研究所、宮本記念財団
「オロッコ・ギリヤークの生活」（昭和 13 年 8 月　18 分）所蔵：宮本記念財団